

## 4 集合と論理

4.1 集合の濃度

4.2 ブール代数

4.3 論理関数

## 4.1 集合の濃度

集合  $A$  の濃度 :

$$|A| = \begin{cases} \text{要素の数} \cdots \text{if } A \text{ は有限集合} \\ \text{加算無限} \cdots \text{if } A \text{ は自然数と対応がつく} \\ \vdots \end{cases}$$

- 以下の集合は加算無限か？

自然数: 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6, ...  
偶数 : 0, 2, 4, 6, 8, 10, 12, ...  
奇数 : 1, 3, 5, 7, 9, 11, 13, ...  
素数 : 2, 3, 5, 7, 11, 13, 17, ...  
整数 :  
実数 :  
有理数:

## 濃度の比較

- $A =_C B$ : 全単射 (1対1かつ上への写像)  $f : A \rightarrow B$  が存在
- $A \leq_C B$ : 単射 (1対1写像)  $f : A \rightarrow B$  が存在
- $A <_C B$ :  $A \leq_C B$  かつ  $A \neq_C B$
- 有限集合  $<_C$  加算無限集合

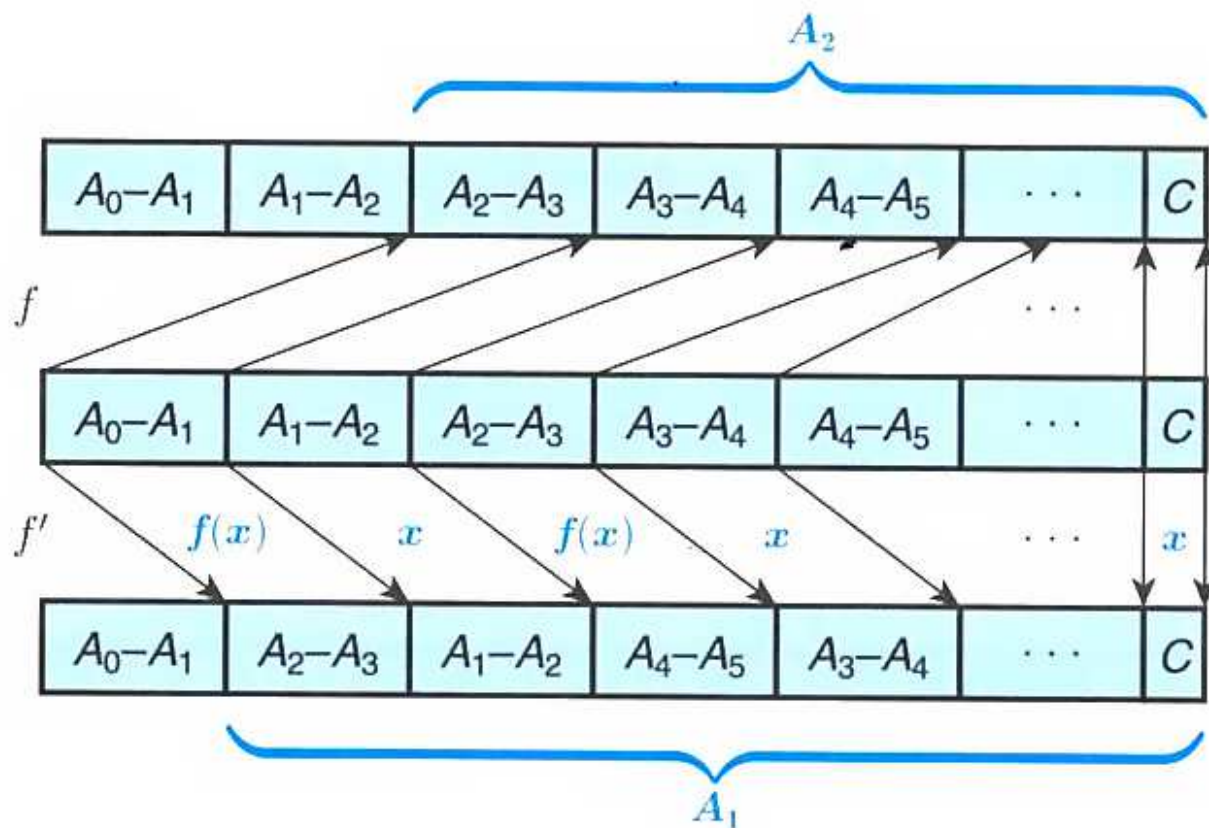
問4.2 濃度の等しさ  $=_C$  が同値関係であることを示せ

補題4.1 :  $A_0 \supseteq A_1 \supseteq A_2$  かつ  $A_0 =_C A_2$  ならば、

$$A_0 =_C A_1$$

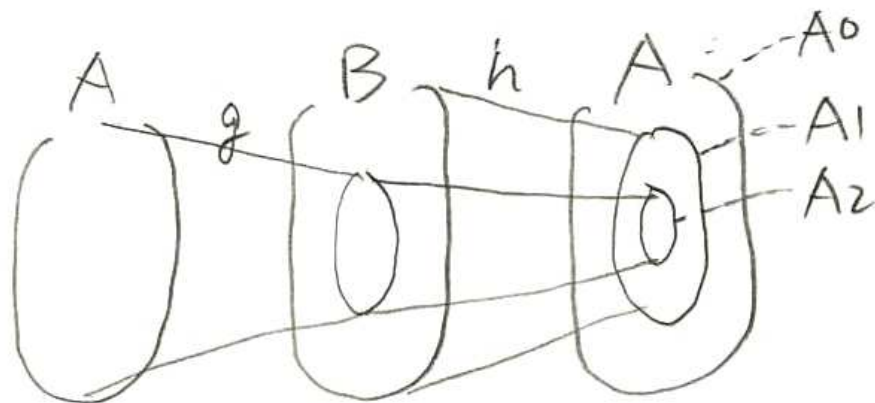
証明 :  $A_0 =_C A_2$  より全単射  $f : A_0 \rightarrow A_2$  が存在

- $f$  から以下のように全単射  $f' : A_0 \rightarrow A_1$  が定義できる



定理4.1 :  $A =_C B \iff A \leq_C B \wedge B \leq_C A$

証明 : 単射  $g : A \rightarrow B$ ,  $h : B \rightarrow A$  が存在し



- $g \circ h : A \rightarrow A_2$  は全単射なので  $A =_C A_2$
- 補題4.1より  $A =_C A_1$
- ここで、 $h : B \rightarrow A_1$  も全単射なので  $B =_C A_1$
- よって問4.2より、 $A =_C B$

問4.4 :  $\leq_C$ が反射律と推移律を満たすことを示せ

定理4.2 : 任意の  $A \subseteq \mathbb{N}$  に対して、

$$|A| \in \mathbb{N} \iff A =_C \mathbb{N}$$

証明 : ( $\Leftarrow$ ) 明らか (全単射  $f : \mathbb{N} \rightarrow A$  を考えよ)

( $\Rightarrow$ )  $|A| \in \mathbb{N}$  とする。  $A \subseteq \mathbb{N}$  より、  $A$  の要素は小さい順に並べることができるため  $A =_C \mathbb{N}$

問4.5 : 任意の  $A \subseteq \mathbb{N}$  に対して、

$$|A| \in \mathbb{N} \iff \exists B (\subset A) B =_C A$$

略解 ( $\Rightarrow$ ) 定理4.2より  $|A| \in \mathbb{N}$ 、全単射  $f : A \rightarrow \mathbb{N}$  有。

$A - f(0)$  で  $B$  を定めると、  $g(x) = f(x + 1)$  は全単射

( $\Leftarrow$ )  $|A| \in \mathbb{N}$  とすると、  $B (\subset A)$  について  $|B| < |A|$

加算無限より大きい濃度の集合

(注)  $2^A = \{X \mid X \subseteq A\}$  (教科書 p.18 の定義)

定理 4.3 : 任意の集合  $A$  に対して、 $A <_C 2^A$

証明 :

$(A \leq_C 2^A)$   $f(x) = \{x\}$  で定まる  $f : A \rightarrow 2^A$  は単射

$(A \neq_C 2^A)$   $f : A \rightarrow 2^A$  が全(単)射と仮定する

- $B = \{a \in A \mid a \notin f(a)\} \subseteq A$  とおく

すなわち、どんな  $a \in A$  にも、 $a \in B \iff a \notin f(a)$

- $f(a) = B$  を満たす  $a \in A$  は存在しない。なぜなら、  
 $a \in f(a)$  なら  $a \notin B$ 。また、 $a \notin f(a)$  なら  $a \in B$

- よって、 $f$  が全射であることに矛盾

問4.6 :  $A =_C B$ ならば $2^A =_C 2^B$ であることを示せ

略解 全単射  $f : A \rightarrow B$ から以下のように定まる  $g :$

$2^A \rightarrow 2^B$ が全単射であることを示せばよい

$$g(X) = \{f(a) \mid a \in X\}$$



例  $\mathbb{N} =_C \mathbb{Z} =_C \mathbb{Q} <_C \mathbb{R} =_C 2^{\mathbb{N}}$

教科書 **p.114** から **p.117** を参照

定理 4.5, 系 4.5.2 :  $\mathbb{N} \times \mathbb{N} =_C \mathbb{N}$ ,  $\mathbb{Q} = \mathbb{N}$

定理 4.6 :  $\mathbb{N}^* = \bigcup_{n=0}^{\infty} \mathbb{N}^n$  と書くとき、 $\mathbb{N}^* =_C \mathbb{N}$

証明 :  $\mathbb{N}^*$  を  $G_0, G_1, \dots$  にグループ分けできる

$$G_m = \{(a_1, \dots, a_n) \in \mathbb{N}^* \mid m = a_1 + \dots + a_n\}$$

各  $G_m$  は有限集合なので、 $\mathbb{N}^*$  の要素を  $G_0, G_1, \dots$  の順に並べられる

定理4.7 :  $\mathbb{R} =_C 2^{\mathbb{N}}$

証明 : 系4.5.2、問4.6より  $2^{\mathbb{N}} =_C 2^{\mathbb{Q}}$

$(\mathbb{R} \leq_C 2^{\mathbb{Q}})$  :  $H : \mathbb{R} \rightarrow 2^{\mathbb{Q}}$  を以下のように定める

$$H(\alpha) = \{x \in \mathbb{Q} \mid x \leq \alpha\}$$

二つの実数の間には必ず有理数が存在するので、 $H$  は  
単射

$(2^{\mathbb{N}} \leq_C \mathbb{R})$  :  $h : 2^{\mathbb{N}} \rightarrow \mathbb{R}$  を以下のように定める

$$h(A) = \sum_{n \in A} 3^{-n}$$

問4.9より  $h$  は単射

問4.9 :  $h(A) = \sum_{n \in A} 3^{-n}$  で定まる  $h : 2^{\mathbb{N}} \rightarrow \mathbb{R}$  が単射であることを示せ

略解 :  $A \neq A'$  とする。一方にだけ含まれる要素の最小を  $k$  とし、 $k \in A, k \notin A'$  とする

$$\begin{aligned} h(A) - h(A') &> 1/3^k - (1/3^{k+1} + 1/3^{k+2} + \dots) \\ &> 1/3^k - 1/(2 \cdot 3^k) \\ &> 0 \end{aligned}$$

よって、 $h(A) \neq h(A')$

## 4.2 ブール代数

**代数** : 集合とその上のいくつかの演算

**ブール代数** : 以下の公理を満たす代数  $\langle A, \{0, 1, \vee, \wedge, \neg\} \rangle$

冪等則  $x \wedge x = x \vee x = x$

交換則  $x \wedge y = y \wedge x, x \vee y = y \vee x$

結合則  $(x \wedge y) \wedge z = x \wedge (y \wedge z),$   
 $(x \vee y) \vee z = x \vee (y \vee z)$

吸収則  $(x \wedge y) \vee x = x, (x \vee y) \wedge x = x$

分配則  $(x \vee y) \wedge z = (x \wedge z) \vee (y \wedge z),$   
 $(x \wedge y) \vee z = (x \vee z) \wedge (y \vee z)$

補元  $x \vee \neg x = 1, x \wedge \neg x = 0$

## 4.3 論理関数

**論理関数**： **ブール領域**  $\mathbb{B} = \{0, 1\}$  上の関数

次の定理から、どの  $f : \mathbb{B}^n \rightarrow \mathbb{B}$  も、関数  $\wedge, \vee, \neg$  の合成で表せることが分かる

**定理 4.9**： シャノンの展開定理

任意の  $f : \mathbb{B}^n \rightarrow \mathbb{B}$  に対して以下が成り立つ

$$\begin{aligned} & f(x_1, \dots, x_{n-1}, x_n) \\ &= (f(x_1, \dots, x_{n-1}, 0) \wedge \neg x_n) \\ &\quad \vee (f(x_1, \dots, x_{n-1}, 1) \wedge x_n) \end{aligned}$$

**証明**：  $x_n = 0$  と  $x_n = 1$  で場合分けすれば示せる

## 定理 4.10 : 和積標準系 (DNF)

$$f(x_1, \dots, x_n) = \bigvee_{f(a_1, \dots, a_n)=1} \bigwedge_{i=1}^n x_i^{a_i}$$

ここで、 $x_i^1 = x_i$ ,  $x_i^0 = \neg x_i$

例 : 右の表で与えられる論理

関数  $f$  の **DNF** は、  
 $(\neg x \wedge y) \vee (x \wedge \neg y)$

$x$	$y$	$f(x, y)$
0	0	0
0	1	1
1	0	1
1	1	0

## 定理4.10' : 積和標準系 (CNF)

$$f(x_1, \dots, x_n) = \bigwedge_{f(a_1, \dots, a_n) = 0} \bigvee_{i=1}^n x_i^{\neg a_i}$$

ここで、 $x_i^1 = x_i$ ,  $x_i^0 = \neg x_i$

例 : 右の表で与えられる論理

関数  $f$  の **CNF** は、

$$(x \vee y) \wedge (\neg x \vee \neg y)$$

$x$	$y$	$f(x, y)$
0	0	0
0	1	1
1	0	1
1	1	0

### ● CNFサイズの爆発

問4.18 :  $\vee$  と  $\neg$  で任意の論理関数を表せることを示せ

解 :  $x \wedge y = \neg(\neg x \vee \neg y)$  より明らか

**$f$ が充足可能** :  $f(x_1, \dots, x_n) = 1$ を満たす  $x_1, \dots, x_n \in \mathbb{B}$ が存在する

**Tseitin変換** : 新しい変数を導入するが、充足可能性を保存したまま **CNF** に変換する変換。

各関数  $f \in \{\wedge, \vee, \neg, \dots\}$  に対して、

$$\begin{cases} T(x) = \langle x, 1 \rangle & x \text{が変数、} \mathbf{0}, \mathbf{1} \text{のいずれか} \text{のとき} \\ T(f(\phi_1, \dots, \phi_n)) = \langle z, \delta \wedge \psi_1 \wedge \dots \wedge \psi_n \rangle \end{cases}$$

ここで、 $z$ は新しい変数、 $T(\phi_i) = \langle y_i, \psi_i \rangle$ ,

$\delta$ は  $(z \Leftrightarrow f(y_1, \dots, y_n))$  と等価な **CNF**

補題 :  $T(\phi) = \langle z, \psi \rangle$  とするとき、 $\psi$ は **CNF**



**Teistin変換の例** :  $(x_1 \wedge x_2) \vee (x_3 \wedge x_4)$  を **Teistin変換**する

$$\begin{aligned} T(x_1 \wedge x_2) \\ = \langle z_1, (\neg z_1 \vee x_1) \wedge (\neg z_1 \vee x_2) \wedge (z_1 \vee \neg x_1 \vee \neg x_2) \rangle \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} T(x_3 \wedge x_4) \\ = \langle z_2, (\neg z_2 \vee x_3) \wedge (\neg z_2 \vee x_4) \wedge (z_2 \vee \neg x_3 \vee \neg x_4) \rangle \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} T(x_1 \wedge x_2) \vee (x_3 \wedge x_4) \\ = \langle z, (\neg z \vee z_1 \vee z_2) \wedge (z \vee z_1) \wedge (z \vee z_3) \wedge \dots \rangle \end{aligned}$$

$\phi$  と  $\psi$  は **充足可能性が等価** :  $\phi = 1$  とする変数の割当に対して、それに  $\psi$  だけに現れる変数を追加して定めることで  $\psi = 1$  とできる。また逆も可能

定理：  $T(\phi) = \langle z, \psi \rangle$  に対して、 $\phi$  と  $z \wedge \psi$  は充足可能性が等価

略証：  $\phi$  の構造に関する帰納法。

- $\phi = \phi_1 \wedge \phi_2$  のとき、
  - $\phi = 1$  とすると、 $\phi_i = 1$  と帰納法の仮定 (**IH**) より  $y_i = \psi_i = 1$ 。  $z = 1$  ととれば、 $\delta = (z \Leftrightarrow y_1 \wedge y_2) = 1$ 。 よって、 $z \wedge \phi = 1$
  - $z \wedge \phi = 1$  とすると、 $\delta = 1$  より  $y_1 = y_2 = 1$ 。 また、 $\psi_1 = \psi_2 = 1$  と **IH** より  $\phi_1 = \phi_2 = 1$ 。 よって、 $\phi = 1$ 。
- その他の場合も同様